

不登校の今日的傾向と「初発対応」の重要性

大石 英史

The Recent Tendency of School Refusal and the Importance of
“Intervention at the First Onset”

Eiji OISHI

(Received September 30, 2005)

1. 「初発対応」の重要性に関する検討

文部科学省が公表した2004年度の学校基本調査速報によれば、年間30日以上欠席のうち、病気、経済的理由などを除いた不登校児童生徒は、3年連続で微減し、全体で12万3317人となった。そのうち小学生は2万3310人（全体の0.32%）、中学生は10万7人（全体の2.73%）であり、不登校の約81%は中学生が占めていることになる。そして、中学校では依然として37人に1人が、不登校で学校を休んでいるという計算になる。しかも、小学校6年から中学校1年にかけて、不登校児童生徒数は約3倍近くに跳ね上がる。これらの統計的数値は、不登校があたかも中学校の問題であるかのような印象を与える。

しかし、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが2002年12月に行った調査によると、中学1年生で不登校であった生徒の半分は、すでに小学校時に何らかの形で学校を長期欠席していた児童であることがわかった。逆に、小学校時代にあまり学校を休まなかったにもかかわらず、中学1年生で不登校になった生徒は、全体の約4分の1に留まっている。また、山口県不登校対策会議も同様の調査を行い、2002年度の山口県における中学校1年生の不登校生徒の、小学校時代の不登校経験について以下のようにまとめている。

- ① 中学校に入学して初めて不登校になったと判断される事例は、全体の25.6%である。
- ② 中学校1年生における不登校生徒のうち、47%は小学校4～6年時代の不登校経験者である。さらに、小学校4～6年時代に不登校傾向（不登校傾向があり、欠席15～30日未満）であった者を加えれば、70%となる。
- ③ 小学校時代の不登校経験者や、不登校傾向がみられた者は、中学校1年生の4・5月の早い段階から欠席が目立つ。
- ④ 小学校時代の不登校経験者や不登校傾向がみられた者の多くは、学力が良好とは言えず、学習の遅れが指摘できる。

これらの結果は、中学校1年生の不登校の約7割が小学校4～6年時代に不登校ないしはその傾向を持っていること、中学校から初めて不登校になる生徒は4分の1程度であること、不登校の子どもたちは学習の遅れが目立つことなどを示している。

本論文では、病気以外の理由で学校を休むことがはじめて数日間以上続いた状態を「不登校初発段階」と定義する。そして、この不登校初発段階における周囲の者による援助ないしは対応を「初発対応」と呼ぶことにする。この言葉を用いることで、初期対応（不登校初期一般における対応）と初発対応（はじめて不登校が始まったときの対応）とを厳密に区別し、「不登

校支援においては初期対応ではなく、初発対応がより重要である」と指摘することが可能となる。不登校初発段階とは、学校に通うことに伴うストレスへの対処法として、学校を休むことがはじめて学習されたときを意味している。子どもが不登校になるときは、負の要素がいくつか重なっていると一般的に言われているが、仮にそのような状況になったとしても、すべての子が同じように学校に行かなくなるわけではない。例えば、家庭内が動揺していても学校に行く子はやはり学校に行く。あるいは家庭内が動揺しているからこそ学校に行くという子がいるかもしれない。したがって、不登校という適応機制を用いる子とそうでない子がいるのは、そもそも不登校が対処行動のひとつだということの意味する。いったん学習されたものが克服されるには、より適応的な別の対処法を学ぶか、あるいは自律的な方向での発展解消を目指していくことが必要となる。

不登校とは、その子によって選ばれたストレス対処行動のひとつである。別の言い方をすれば、不登校とは自分を生きることのひとつの在り様である。それは、人とのかかわりをいったん拒絶して、自己を建て直す試みである。その意味で、まずは自己回復のための時間が保証されることが重要である。休息が取れれば、いずれ人とのかかわりの中に戻っていけることが、本来の健康な状態である。そのタイミングを逃し続けていることが、不登校の中心の問題と言える。「初発対応」の重要性が、単に早期に学校に戻すことを行うのにすぎないのであれば、これを強調することは、その子の不登校という形での自分探しを妨げてしまうことにもなる。したがって、「初発対応」の中身は、この時期の心の揺れをしっかりと受け止め、できるだけ本人自身がよりよい方向での判断を行えるための支援でなければならない。

2. 「初発対応」の現状

しかし、初発時点における子どもの状態と周囲の対応が噛み合わなかった場合、子どもはさらに家にひきこもることで自分を守ることしかできなくなる。例えば、これまで、以下のような対応が繰り返されてきた。

- ・嫌がっている本人を教師が強引に学校に連れて行こうとする。(場合によっては、それを見兼ねた保護者が止めに入る。その結果、保護者も学校や地域に対して心を閉ざしてしまう。)
- ・保護者が子どもの気持ちを理解しようとせず、一方的に登校のみを強制する。(場合によっては、子どもは逃げ場を失い、家庭内暴力へと発展する。)

これらの対応の結果、子どもはますます追い詰められ、不登校は長期化していく。そして、長期化すること自体が学校への復帰を難しくしていくという悪循環が生じる。すなわち、不登校初発時における子どもの状態は非常に不安定になっており、それゆえに、働きかけに際しては十分な配慮が必要である。

一方、教師や保護者が、登校刺激を与えることそのものに対して臆病になり、初発段階における子どもの気持ちの動揺をしっかりと受け止めることなく、不登校になっていくことをそのまま受け入れてしまうという逆の問題もある。例えば、教師にも保護者にも、以下のような傾向が最近多く見られるようになってきた。

- ・(保護者も教員も) 子どもが学校に行けなくなったきっかけや背景に何があるのかを十分探ることなく、不登校になっていくことをただ見守っている。
- ・登校を促すことでかえって本人を追い詰めてしまうのではないかという気持ちから、かかわりそのものから逃げてしまう。
- ・不登校の子はたくさんいるという理由から、自分の子もそのひとりだと安易に了解してしま

い、目の前の本人のことは見ようとしない。

いずれの場合においても、「不登校初発段階」における周囲の者によるかかわりが、本人自身の心の文脈に沿っていないことから、対応や連携がちぐはぐとなり、長期化を招いているという可能性が考えられる。ちなみに、2000年度の学校基本調査における不登校児童生徒の年度内復帰率は、約25%であると言われているが、この数値は、いったん不登校になった子どもが、同じ学校や教室に復帰することがいかに難しいかをよく示している。

不登校は学校に行かずに家で好きなことをしているので楽だという声がよく聞かれるが、家にいて好きなことをやるという生活は子どもにとって必ずしも楽なことではない。学校を休んでいることから生じる負の感情（罪悪感、焦り、怒りなど）を回避するために、ゲームやテレビにのめり込む。そこまでして、回避し続けなければならない学校プレッシャーに対して、少しでも前向きな対処を本人が行えるような手助けをしていくことが援助者本来の役割である。別の言い方をすれば、不登校になった後、家の中で与えられた自由な時間を自己管理していくことを、安易に子どもの主体性に任せることは、多くの子どもたちにとっては、とても酷なことである。しかも、急性期を通過し、安定期を迎えた不登校の子どもにとって、元の教室という場所に復帰することは、その場を離れることでしか克服できなかったその場所に再び戻るといえる意味では、誰が考えても難しいことである。ここに本人と話し合いながら、より適切な教育のための環境と居場所を探すことが必要になってくる理由がある。

3. 「初発対応」における学級担任の役割の重要性

2000年度学校基本調査によれば、全不登校児童生徒のうち、教育支援センター（適応指導教室）をはじめ、教育委員会所管の相談機関、児童相談所・福祉事務所、保健所・精神保健福祉センター、病院・クリニック等いずれの施設・機関においても支援を受けていない子どもたちが約66%いる。また、学校において、養護教諭、スクールカウンセラー、心の教室相談員等による専門的な相談や指導が行われているが、これらいずれの支援も受けない子どもたちが全体の約42%存在する。ということは、少なくとも約4割の不登校の子どもたちは、学級担任以外のサポートを受けられずに放置されている。より正確に言えば、約4割の不登校の子どもたちは、家族以外の支援者が学級担任に限られており、学級担任次第で子どもの将来が左右されるという状況の中にいることになる。しかも先に述べた「初発対応」の観点を加味すれば、小学校の学級担任が不登校に対して担っている責任は大きいと言わなければならない。特に不登校の「初発対応」段階において、本人にかかわれるのは、学級担任と保護者である。この時期には、学級担任にしかできない対応があることを忘れてはならない。もちろん、残りの約6割の子どもたちは他の支援を受けているとはいえ、当の学級担任との関係がうまく取り結べているという前提があってはじめて、その支援も意味を持つものとなる。

では、学級担任にはどのような対応が求められているのだろうか。このことは、担任がその子の問題を一人で抱え込んで対応しなければならないということの意味しているのではない。まず学級担任は、本人と保護者に対して信頼関係を築くことを目的にかかわっていく。互いが相手に問題の責任を求めていくようであってはならない。子どもが学校に行かなくなったとき、多くの場合、親は何とかして行かせようとする。しかし、この強制がもはや機能しなくなるほどに本人が疲労している場合には、その働きかけは逆効果となる。親と子の関係が逆転しているケースでは、学校ストレスに対して子どもは休むことを主張し、それによって親をコントロールするようになることもある。「学校に行くなら」という条件で親は親としての権限を子ども

に委譲していく。このような場合、教師は親を支えることからはじめなければならない。

筆者(1994)は、「不登校初期の子どもの援助」という論文の中で、主に小学校の不登校初発段階にある子どもたちとその母親のセラピの有効性について考察した。その中で、母親が子どもの登校しぶりに対して、早めに気づき、何らかの対応を行うことが、早期の回復に必要であること、特に、母親自身が子どもの登校しぶりに対して自分なりに思い当たることを内省していけることが重要であることを指摘した。また、不登校問題に関する調査協力者会議が、2002年に全国4000人の不登校の子を持つ保護者を対象に行った調査によれば、学校に対する不満点・評価点について、次のような結果が示されている。不満点としては、「性急に登校を求められるのが辛い」と感じている保護者が全体の1割を占める一方で、「家庭訪問・連絡も少なく見捨てられたように思う」という保護者は、全体の4分の1に達している。評価点としては、「教師が相談に乗ってくれた」と回答した保護者が半数にのぼり、学校の対応として「別室登校などの措置を取ってくれた」についても4割を超える保護者が肯定的な回答をしている。これらの結果から、「そっとしておいてほしい」と思う一方で、長期間何の連絡もないと不安になる保護者の状況が見て取れる。学級担任は、このような保護者の思いに十分寄り添っていかなければならない。特に不登校初発時においては、学級担任が鍵を握っていることは確かであるが、学級担任は、その子に対する適切な理解と支援ができるように、他教員や専門家の力を借りながら動いていく必要がある。

4. 小学校から中学校にかけて不登校が3倍に増える理由

ともあれ、不登校が小学校6年から中学校1年にかけて3倍に増え、そのまま3年生まで増え続けることは統計上の事実である。この増加の背景には、どのようなことが考えられるだろうか。

①環境変化それ自体

第一に、小学校から中学校にかけての環境変化それ自体が、子どもたちにとって大きなストレスとなっているという認識が必要である。これは、幼稚園・保育園から小学校、あるいは中学校から高校への環境変化についても同様のことがいえ、これら校種間のなめらかな環境移行を考えていくことは、今後の重要な課題でもある。

②学校システムの変化

第二に、小学校から中学校にかけての環境変化として、学校システムが大きく変化することが考えられる。具体的には、以下のようなものが挙げられる。

- ・教師の生徒指導への姿勢が厳しくなる。
- ・学校に拘束される時間が長くなる。
- ・部活動が始まる。
- ・先輩とのタテ関係が始まる。
- ・成績による順位づけがはっきりしてくる。
- ・学習内容が難しくなる。
- ・教科担任制になり、担任とのかかわりが減る。これに伴い、クラスという所属意識が希薄になり、「自分が担任から守られている」という実感が薄くなる。

③思春期心性

第三に、この時期が子どもたちにとってちょうど思春期に当たり、それに伴う著しい心身の内的変化が生じてくる。具体的には、以下のようなことが挙げられる。

- ・自我意識の発達により、それまで気にならなかったことが気になってくる。
- ・他者の評価が気になり始める。
- ・世の中や自分自身に対する理想と現実のギャップを意識し始める。
- ・衝動性が高まり、その制御のために緊張を強いられる。
- ・大人から距離を取るようになり、自分から助けを求めなくなる。
- ・学校に対するマイナス感情（教師や大人社会、仲間への不信感、だるい、おもしろくない、面倒くさい、など）を不登校という形で表現できる時期になる。

これら3つの変化に、子どもたちは外的にも内的にも適応していかなければならず、この適応への躓きのひとつが不登校という形で現れてくるものと考えられる。

しかし、一方、これらのことは昔から変わらずあったことも確かである。より本質的な問題は、なぜこの変化への適応に躓き、不登校になる子が増えたのかということである。これに関しては、子ども同士の関係の中にあるサポート機能の弱体化と子どもの環境変化への耐性のいずれもが低下したことが考えられる。思春期になって、それ以前の間人関係の経験不足が顕在化する。それまでは親や教師が介入することで乗り越えてきた仲間関係をめぐるとラブルに対して、思春期になり子どもが大人の介入を自ら拒むようになり、一人で抱え込む形で不登校となるのである。

5. 特別な配慮を必要とする5つの不登校

ここで、不登校の初発対応をより効果的に行っていくために、不登校初発段階において、特別な配慮を要するものを以下に提示する。

- ① いじめによる不登校…繰り返される陰湿で執拗ないじめ、その結果としての PTSD を伴う学校恐怖ないしはひきこもり
- ② 精神疾患による不登校…思春期うつ病、統合失調症の初期症状、その他、精神医学または神経生理学的要因を背景に持つ不登校
- ③ 軽度発達障害による不登校…アスペルガー症候群、高機能自閉症、LD、ADHD 等の軽度発達障害を背景にもつ不登校
- ④ 虐待による不登校…軽度のネグレクトをはじめ基本的な生活習慣の未確立、虐待を含めた親の養育力のなさ、あるいは母親の精神疾患等を背景とする不登校。母親が子どもを抱えこむ形で学校とのつながりを断つことによって生じる不登校。
- ⑤ 遊び・非行による不登校…家や学校に居場所がなく、外出して仲間との交流を楽しんでいる不登校

これらの背景が認められる場合には、学級担任は他教員や関係機関とも連携を取りながら、本人にとってのよりよい教育環境を用意していくことが重要となる。①については、学級担任を他教員が支える形で、いじめへの早期介入が必要である。また、②③④は、医師や臨床心理士などの専門家、あるいは児童相談所との連携による支援が必要となってくる。⑤は場合によっては、警察と連携していかなければならないこともあるだろう。実際には、これら5つの領域のいくつかは、一人の子どもの背景として重なっていることもあり、明確な区分が難しいケースもある。それぞれの領域は互いに地続きであり、各領域における程度の問題として見ていく方がわかりやすい。すなわち、その子が抱えている背景の中で最も不登校と関係が深い領域はどれなのかという見方をしていく。現在の状況としては、不登校の中核的領域を占めているのが神経症的不登校であり、その中でも甘やかされ型が近年増加傾向にある。5領域の中では、

④の養育上の問題を背景に抱えている不登校と③の軽度発達障害を背景にもつ不登校が、これに続いて多いと考えられる。不登校の中核群とそこから派生してくる特別な配慮を要する領域をわかりやすく示したものが図1である。

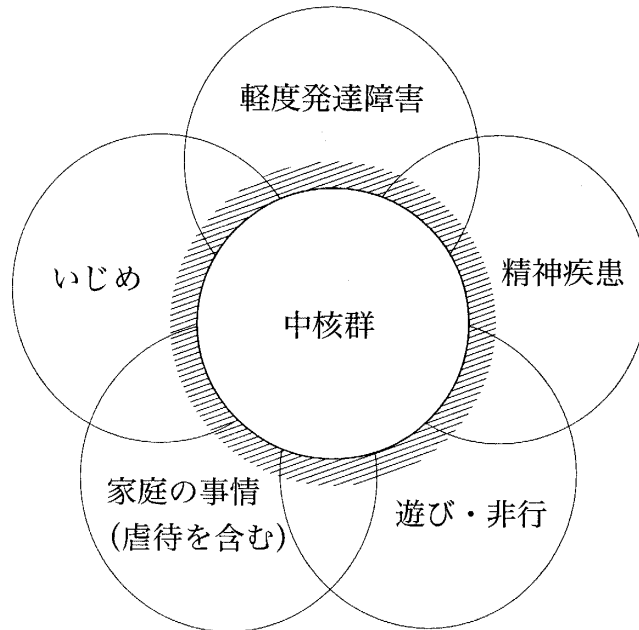


図 1. 不登校中核群と特別な配慮を必要とする諸領域

また、軽度発達障害の特性と不登校がリンクしやすい部分については、次の2点が考えられる。ひとつは、教師のかかわりに関する強いこだわりが不登校につながる場合、もうひとつは、仲間によるいじめ・からかいが不登校につながる場合である。前者は、教師の指示が理解できず、叱られたことに対する強いこだわりが生じ、その教師に対する否定的な思いを自分でコントロールすることができずに、引きこもってしまうケースなどがこれにあたる。後者は、場を読めていない言動が他の生徒から馬鹿にされ、直接的に攻撃を受けたり、間接的に陰でコソコソ噂されることによって、学校に居場所を失い不登校になっていくケースである。特に、この問題は、自我意識が芽生える思春期以降に生じやすい。

上に取り上げた5項目のいずれも主たる原因とは考えにくい不登校が「神経症的な不登校」、すなわち、依然として不登校の中心を占めると考えられる「不登校中核群」であり、以下ではこのタイプの不登校に焦点を当て、その今日的傾向と「初発対応」について論じることとする。

6. 中核群の2タイプとその背景

(1) よい子の息切れ型

神経症的な不登校、すなわち不登校中核群には2つのタイプがある。ひとつは、一時的に人を遠ざける必要に迫られたひきこもりタイプ、別名「よい子の息切れタイプ」である。思春期の到来と共にひきこもるケースとも言える。それまでの不登校傾向は見られないことが多く、基本的な耐性は高い。幼児期に親に十分甘えた経験を持たず、母親からは手がかからない子だったと言われることが多い。これは乳幼児期における発達課題である基本的信頼感の獲得が十分ではなかったことを意味する。基本的信頼感とは、この世界への信頼、他者への信頼を通して「自己信頼感」として結実する。その体験の不十分さが思春期における自己確立を難しくする。

その結果、思春期に入ってから頑なにひきこもる、ひきこもることで自己を再確立する必要に迫られるのである。初発の時期においては、他者によるほとんどの働きかけは拒否される。どちらかといえば、長男、長女に多く、特に男子の方がこの傾向が強い。多くのケースが長期化する。その意味で、「初発対応」の難しいタイプである。したがって、よい子の息切れ型への対応において重要なことは、中核にある不安を緩めていくことに焦点を当てることである。また、硬すぎる超自我を緩め、弱音を吐けるようになることが課題である。しっかり見守ってやると、自分から動き始める。しっかりと見守られることで回復してくるタイプである。

(2) 甘やかされ型、別名「何となくの不登校」

もうひとつのタイプが、小泉(1988)が指摘した「甘やかされ型」である。これは、不登校への罪悪感が比較的少ない子たちであり、「葛藤の少ない不登校」あるいは「明るい不登校」などと呼ばれることもある。筆者(2003)は、不登校の今日的傾向として、葛藤の見えにくさが顕著であり、不登校という自分の現実を直視していくリアリティが弱くなってきていることを指摘した。このタイプには共通して、対人関係に対して受け身的で傷つきやすく、不登校になった理由が自分でもはっきりしていないことが多く、筆者は、「何となくの不登校」と呼んでいる。彼らは、幼児期の発達課題である小児万能感の克服がうまくいかなかった子たちである。それは親子関係、他の大人との関係、兄弟関係、仲間関係その他様々な人間関係のトラブルを経験する中で進行していくはずのものである。精神分析の言葉で言うなら、「去勢」される体験を経ないまま思春期を迎えた子たちだということになる。小児万能感を思春期まで持ち越した子は、思春期の間人関係でひどく傷つき、ひきこもることで自分を守ることにしかできなくなる。基本的な耐性が弱い子であるが、現代の多くの子どもたちは、多かれ少なかれこの傾向を持っている。その意味において、やはり不登校はどの子にも起こり得るといわなければならないだろう。小児万能感の温存、「去勢」のない社会から派生する様々な教育上の問題は、これから取り組むべき最重要課題のひとつである。甘やかされ型の特徴としては、次のようなものが挙げられる。

- ・学校に行かなければいけないのはわかっているけど、その日になると行けなくなる。
- ・自分の嫌なことは避けるが、好きなことには参加できる。
- ・修学旅行などの行事には参加できる。
- ・教室に入る前はぐずるが、いったん入ってしまうと最後まで元気にやれる。
- ・行動を起こす前に不安が膨らみ、やるべきことがやれない。
- ・不安や葛藤を意識化ないしは言語化することが苦手である。

以上のような特徴を持つ子どもたちは、見守っているだけでは、自分からはなかなか動き出せない。仮に、周囲の人たちから暖かく見守られる中で怠け心が増してくるようであれば、怠け心との対話できるようになること、怠け心を上手に手なづけられるようになることが課題となる。どちらかといえば末っ子に多い。

対応において留意する点は、本人が乗り越えていく課題を決して次々と要求しないことがポイントである。例えば、修学旅行だけには参加できる。好きな行事には出て来れる。「来れば普通に頑張れるのだから続けて来なさい」と要求しないこと。まずは、来れたことをしっかり認めてやること。そして、「できることからやっつけていこう」「遅れは取り戻せる」というメッセージを送りつつ、現実の行動を促していく。寄り添いつつ、問いかけていく。

このタイプはさらに2つのタイプに分けられる。ひとつは、学校に行かないことから生じて

くる問題についてのリアリティを付与し、「これだけはやっていこう！」と働きかけていくことが功を奏するタイプ。もうひとつは、ひとりの信頼できる人との出会いを通して、外の世界へとつながっていくタイプである。前者は男子、後者は女子に多い。社会性という観点からすれば、女子の方に社会性を有するタイプが多い。いずれのタイプも発達課題の観点からは、とりわけエディプス期における超自我形成（去勢体験）を課題としている。さらに、他者とのかわりの中で小児万能感を克服していくことや我慢することを通して充実感を味わう体験を蓄積していくことが必要であり、これらは思春期を迎えるまでの発達課題でもある。これらの体験により自分の人生を生きる主体の部分が育ってくるのが、甘やかされ型不登校に共通する発達課題である。

(3) きっかけについて

甘やかされ型不登校の増加と周囲の子どもたちからのいじめやからかいの深刻化は表裏の現象である。それは、一人一人の子どもが安心して過ごせる空間が学校や教室に少なくなっているということと同時に意味している。

そこで、不登校になったきっかけの有無について考えてみよう。きっかけについては、ある子とない子とがいる。具体的には、髪を切ってきたとき「キモイ」と言われた。「××ってキモイよね」「確かに」などと陰で噂された。すれ違いざまに「キモッ」と言われた。「あいつ意味わからんね。うぜえ」と言われたなどがある。しかも、これらの言葉を何度も繰り返ししつこく言われたということがしばしば共通して語られる。

きっかけがある子の場合、その多くが友人関係のトラブルでその心の傷を癒すための時間が必要である。ただし、早期に対応すれば、早期に復帰できる可能性は高い。つまり、一過性で終わる。きっかけがはっきりしない場合や小学校低中学年で発症する場合には、兄弟葛藤や学級担任のクラスづくりへの不適應などが背景にあることが多い。不登校期間であっても、教師や友人の訪問には応じることができるし、必要なときには外出もできる。このような子たちの中には、他の適応手段を取れたかもしれないが、そのスキルが不足しているために不登校を選ばざるを得なかったように見える子もいる。すなわち、ストレスに対処するための行動のバリエーションがあまりに貧弱であったがゆえに、最も手っ取り早い不登校を選んだということである。

しかし、このタイプの子どもたちの背景には、単にストレス対処行動として学校に行かないことを選択し、長期化することによって復帰がさらにしづらくなったということだけでは捉えきれない理由がある。この子たちは、「学校に行き続けることそのものに失速する」のである。それは、より正確には今の社会の状況や今の社会が向かおうとしている方向に抗して立ち止まることを意味している。この子たちは、「学校の雰囲気」「学校が体現している何か」としか言い表しようのないものを、言葉にならない感覚としてキャッチしたのであり、その意味では、不登校児のことを、現代社会が持っている歪みを先取りしている子どもたちとして理解していかなければならない部分が少なからずある。

このような観点から、増井（2002）は、不登校になる子どもには不登校になることのできる「能力」があることを指摘し、独自の不登校援助論を展開している。また、門・滝川・高岡（1998）の現代不登校に関する考察も、疲労からの回復のために一時的に学校を「休むこと」の意義について言及している。これらの不登校論の根底にあるのは、不登校の子どもたちは、現代社会の効率化とそれに伴う居場所の喪失感を誰よりも強く感じており、心身ともに疲れきっている

という考え方である。このように考えるとき、不登校の治癒像は、不登校による自己実現でなければなるまい。つまり、この子たちは不登校に「陥った」のではなく、「踏み切った」のである。そこからは、「自律型の不登校」という新しい回復像が見えてくる。

(4) 中核群の心理と現代社会

ここでもう一度、社会病理の観点から、不登校中核群の心理について考察しておきたい。快適な個人空間の中で生活するようになった現代人は、同時に非常に速いテンポの時間を生きることになり、神経が慢性的に疲労している。おそらく潜在的には多くの人たちが「立ち止まりたい」「休みたい」と思っているにもかかわらず休めないでいる。

不登校の子どもたちは、学校に行っていないことで、周囲から様々な形で否定される。それにもかかわらず行かないのだから、よほどの理由があるのではないかという見方もできるし、周囲の者による否定的な見方が強いがゆえに、行けないのではないかという見方もできる。前者からは本人の「頑固さ」という名の自己愛性が見て取れる。後者からは、依然として根強い学校神話と休むことを罪悪視する日本人の風潮が見て取れる。一般的に、心身の疲れは、すでに頑張れない体を鞭打つことでさらに昂じていく。そして、現代社会における3つの「間」（時間、空間、仲間）の喪失が、その疲れを増幅する。その意味で、不登校は現代の子どもたちによる「静かな反体制運動」でもある。不登校の子どもには、世直しの側面がある。これが、従来から言われてきた不登校カナリヤ説である。

このような状況性は、学校に行っている子どもたちにも起こっている。「どうせ頑張ってもムダ」「どうせ僕なんか…」とつぶやく子の増大がそれである。新しいニヒリズム、自己中心的合理主義（自分主義）の台頭である。例えば、アンケートで「学校は楽しいか？」と聞かれれば、「はい」ととりあえず回答するが、それは「いいえ」と答える特別な理由がないというに過ぎない。すでに満たされた状態にある子どもたちにとって、学校での勉強に対しては、心のどこかで「こんなに頑張っただうするの？」というつぶやきが生まれている。すでにプラス飽和の状態にあるから、ちょっとしたマイナスストレスでも限界を超えて失速してしまうのである。高度成長期の1970年代までは、今が貧しいから少しでも豊かになるために頑張ることができた貧しい時代は貧しいことそれ自体が生きる意欲の源泉であり得た。プラスに対してもマイナスに対しても心の容量にゆとりがあった。これはそのまま学習意欲の低下問題に通じており、現代の学校教育は、まさにこのようなニヒリズムとの闘いの場と化している。しかし、子どもたちはもはや闘うことをしない。ここで問われている課題は、子どもたちが自己の「楽をしたい心」をどう手なづけ、疲れた心と体をどう癒しつつ生きていくかということであり、これはそのまま教師にもあてはまることである。例えば、「どうしても休みたいときは休みなさい。あとは自分の心とよく相談して決めなさい。ただし、1ヶ月の休みは最大3日までに留めよう。目標は年間30日未満に留めて不登校にならないことだよ」というような働きかけもそのひとつである。このような形で他者強化型の登校刺激から、少しずつ自己強化型、すなわち、自律型の登校へと考え方を転換していく必要がある。このようなタイプの子どもたちには、大げさな自己実現的生き方ではなく、日々ささやかな楽しみを見つけ、こじんまりと平和に生きていく生き方が似合っていることが多い。子どもたちがそのような一日一日を安心して過ごせるように、ささやかな手助けをしていくことが、最も援助的なかわりである。

7. 援助に必要な視点

神経症タイプの不登校の子どもたちは、図2に示すような循環の中で、自己否定感を増幅させやすい。したがって、この循環を逆に展開していくことで、自己肯定感を育てていくことが重要である。そのためには、まず自分が自分で居られる時間と空間を確保し、自己の充実を図ることである。これは、具体的には、ゆっくり休息を取ることや一時的に人を遠ざけてひきこもることを意味する。それによって、充実してくるエネルギーを待つわけである。この「自己領域」が他者から侵されることなくある程度保証されると、人は自分から外の世界に関心を向け、「自発的動き」を起こし始める。この時期には、タイミングよく外の世界に誘ってくれる人や実際に足を運べる場所が用意されることが必要である。そのための周囲の者からの声かけを「他者教示」と呼ぶ。図3に示すように、これら3者が循環することで、本人の自分に対する自信が少しずつ育っていく。不安を中核的特徴とする不登校の子どもたちへの援助は、常にこの3つの視点を視野に入れながらかかわっていくことが求められる。

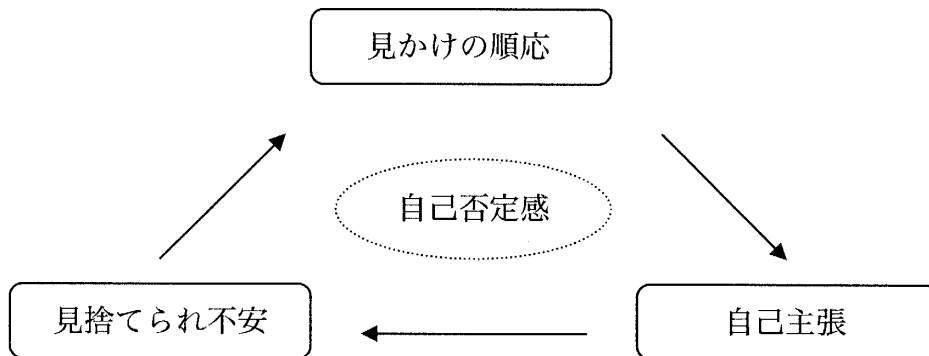


図2. 自己否定感が増幅されていく循環

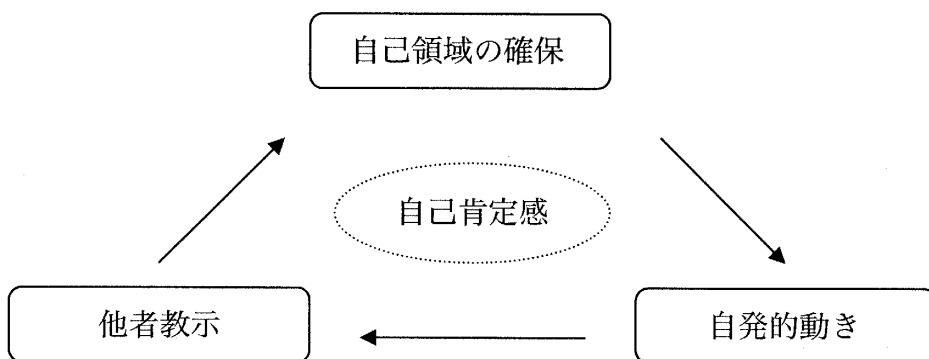


図3. 自己肯定感が育っていく循環

しかし、実際にはこれら3つの視点は不登校の子どもに限らず、すべての子どもたちに必要な教育援助であり、またそうであるからこそ、不登校の子どもにとっても役立つものだということである。特に、不登校が長期化している場合は、学級担任の共感的理解に基づいた柔軟な対応が求められる。学校に復帰させることを前面に出した働きかけは得策ではない。まずは、子どもと親の双方に対して、信頼してもらえ人になるための時間が必要である。子どもや親

から見て、「この先生なら大丈夫かも」と思ってもらえること。そのために、援助者の関心は、本人をいかにして学校に来させるかではなく、本人自身に向けられなければならない。その具体的な形のひとつに、本人が現在関心を持っている事柄を間に置いてコミュニケーションを取っていくという方法がある。

8. 学級担任による甘やかされ型不登校への「初発対応」

一般的に、不登校初発対応段階において、本人の心理状態は、学校に行かなければならないという気持ちともうこれ以上行けないという気持ちの激しい揺れの中で不安定になっていることが多い。そのため、「初発対応」の方法を間違えると、かえって本人を追い詰めてしまうことをよく認識しておくことが必要である。学級担任は、大人の都合で一方向的に登校させようとするのと何もせずに放置することの両極の中間に身を置き、常に子どもの反応を見ながらかわり続けていかなければならない。しかし、近年増加傾向にある甘やかされ型不登校、別名「何となくの不登校」の特性を考慮すれば、早期に丁寧かつ積極的な働きかけを行っていくことが有効であると考えられる。そこで、教師はまず事前の情報と想像力を働かせ、次のような問いを自分自身に行いながら家庭訪問を行う。

- ・「どうしたのだろう？」
- ・「何があったのだろうか？」
- ・「何がこの子の心を重くしているのだろうか？」
- ・「この子の心が少しでも軽くなるために自分に何かできることはないか？」

可能であれば、これらを直接本人に問いかけてみる。そして、次に

- ・「仮にこれといった理由やきっかけがないのなら、学校に行きながらどうしたいのかを一緒に考えてみないか？」
- ・「しばらく保健室か相談室で休んでみるか？」
- ・「あなたがこのまま学校に来なくなるのはさみしい」

などと伝えてみる。

これらの言葉や問いかけにより、学校に行けない当面の理由が見つかれば、それについて話を聞き、少しでも本人にとって過ごしやすい学校生活へのサポートを行っていく。その際、できるだけ登校を続けながら、よりよい環境づくりについて一緒に考えていく。ただし、これらの問いかけに対して、本人が反応を示さなかったり、会いたがらないときは、そこにそれなりの理由があることを尊重し、かかわりを一時差し控えることが望ましい。

小学校の低学年の児童であれば、学級担任が保護者の不安をしっかりと受け止め、保護者が子どもを安心して押し出せるように支援していく。風邪で休んだと言える程度の欠席日数に留めることが当面の目標となる。小学校低学年の子どもたちは、学校に行けない理由を言葉ではなく、身体症状として表現することが多い。学級担任と保護者は、子どもの身体全体の表現を見ながら、登校しぶりの背景に何があるのかについてお互いに意見を出し合い、学校に誘うべきかどうかの判断を行っていく。ただし、周囲の者が「なぜ行けないのか?」「行こうとしないのか?」と問うときの「なぜ」が子どもを責めているときには、子どもは心を開いてくれない。子どものつらさをわかろうとする姿勢、あるいは支援者として何ができるかを謙虚に問う姿勢を持って寄り添おうとするとき、子どもは心を開き始める。

不登校中核群の中核にあるものは、怠けではなく、行きたくても行けない心の葛藤である。その見地からすると、不登校の甘やかされタイプに代表される現代的傾向は、その中核的葛藤

から身を守るための防衛手段であることが理解できる。したがって、その対応においては、心の奥底に沈んでいる現実から逃げることの葛藤を見ておくことである。しかし、本人を自立させなければならないという立場から、一方的に葛藤に直面させ、何らかの行動を起こさせようとするかかわりは、子どもにとって侵襲的である。援助者であるには、まず、うまく言葉にできない葛藤に寄り添うことができなければならない。それは、基本的には何も要求せずにそばに居ること、そのような人であることからはじめなければならない。これが、本人との信頼関係づくりの第一歩である。一方的に何かをさせる人ではなく、積極的に問いかけつつも、一緒に考え、共に居てくれる人を、不登校の子どもたちは待ち望んでいると思われるのである。

<文 献>

- 門眞一郎・滝川一廣・高岡健（1998）不登校を解く ―三人の精神科医からの提案―。ミネルヴァ書房。
- 小泉英二（1988）教育相談の立場からみた不登校の問題。児童青年精神医学とその近接領域。Vol.29, No.6.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2003）中1不登校生徒調査（中間報告）―不登校の未然防止に取り組むために―。
- 増井武士（2002）不登校児から見た世界。有斐閣選書。
- 文部科学省（2001）国公立学校における不登校児童生徒の状況（学校基本調査）。
- 文部科学省（2002）不登校問題に関する調査協力者会議報告書。
- 大石英史（1994）不登校初期の子どもの援助。―母子合同面接を通して―。山口大学教育学部研究論叢 第44巻 第3部。
- 大石英史（2003）不登校の今日的傾向とその課題。山口大学教育学部研究論叢 第53巻第3部。
- 大石英史（2004）学校臨床における保護者および専門機関との連携。山口大学教育学部研究論叢 第54巻第3部。
- 山口県不登校対策会議（2003）山口県不登校対策会議報告書 ―子どもたちの健やかな成長のために―。